

しろくまの新聞コラム問題 小学生のみなさんへ

第一回 問題編

(2009年6月1日天声人語から)

名前の響きで損をしているが、ドクダミはかれんな花である。毒々しい「ドク」から、だみ声の「ダミ」と続く。だが花は白い十字形をし、木(こ)の下闇(したやみ)などに星を散らしたように咲く。

その星々も鮮やかに、六月が始まる。けさ、いつものようにネクタイに手を伸ばしかけて、ふと止めた方もおられよう。《 ① 》も早いもので五年目になる。夏服の通学姿も目立つ朝だ。

へ衣更へて肘(ひじ)のさびしき二三日✓福永耕二

いまの勤め人は、肘よりも(1)に実感があるかもしれない。

気象記念日でもある。1875(明治8)年のきょう東京気象台ができた。9年後のこの日には初の天気予報も出されている。もっとも「全国一般風の向きは定まりなし、天気は変わり易(やす)し、但(ただ)し雨天がち」だったというから、神のお告げを聞くようでもある。

そして【 ② 】雨の暴れる季節がめぐってくる。梅雨や台風(2)に、近年はゲリラ豪雨も加わって(3)ごわい。台風について気象庁は、これまで三日先までだった進路予報を、五日先まで延ばして発表することにした。

早めの備えに役立つし、行楽予定などを判断するにもありがたい。五日先に台風(4)の中心が予報円に入る確率は、70%を(4)指すそうだ。「お告げ」の時代から積み上げた予報技術の粋だろう。

へどくだみに降る雨のみを近く見る✓秋元不死男

ひそやかな白い花には雨が似合う。雨が上がって日が差せば、緑と土の匂（にお）いが命の揺（ゆ）りかごのように立ちのぼる。夏への序曲を聴（き）くような、「水の月」の始まりである。

問1 (1) (2) (3) (4) には、体の一部をあらわす漢字一字が入ります。それぞれ答えなさい。

(1) () (2) () (3) () (4) ()

問2 ≪ ≫ ① ≧ ≨ にあてはまる外来語を記入しなさい。

≪ ≫

問3 【 ② 】 にあてはまる言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア ちなみに イ いみじくも ウ またぞろ エ くしくも

【 ① 】

問4

(1) この文章に題名をつけるとしたら、どのような題名をつけますか。題名としてふさわしい言葉を文中から抜き出しなさい。

(2) また、あなたがなぜその題名をふさわしいと考えたのかその理由を説明しなさい。

☆ これから、機会があれば、短い文章から、語句や内容把握のしろくま問題を時々出していきますね。寝る前にも考えてみてください。 (ではまたね)

しろくまの新聞コラム問題 小学生のみなさんへ

第一回 解答・解説編

問1について

入試では「体の一部」を示す漢字を入れなさい、という問題はよく出ます。

こういう問題は、たいていの場合「慣用句」としての出題が多いのです。たとえば(2)は「顔」。「古顔」という表現があるんですね。人間に使うとベテラン、という意味が出てきたりもします。「むかしからある」という感じの意味合いが出てきます。

(3) 「手ごわい」も、よく使う表現ですよ。 「こわい」は「強い」と表記しますが常用外の表現ですのでひらがなにしている場合が多いものです。(4)も「目指す」で、とくに問題はなかったのではないのでしょうか。

さて、体の一部を入れる問題で、ちょっと注意しなくてはならないものが「慣用句」ではないもの。文中の内容から判断しなくてははいけません。

☆ 対比された例から考えよう

「ネクタイ」の話と「夏服」の話。とくに「衣更え」との関係で言うならば、夏服への変化、とは「長袖」から「半袖」へ。だから「肘のさびしき」となるわけです。長袖に慣れていたけど、半袖になって肘がスースーしちゃうよね、という感じをよんだ俳句です。

半袖と肘、の対比で、ネクタイと首、ともっていければ、(1)の答えは「首」になります。ネクタイをはずせば涼しく感じられる、というわけです。

問2について

これは「外来語」というにはまだ早い言葉でしょう。へんな表現かもしれませんが「新外来語」かもしれません。定着し、それが日本語としてなじめば「外来語」ですから… 聞いたことはありませんか？

「クールビズ」が答えです。言葉を大切にしました出題をする学校では、外来語以外にも、「流行語」などの出題もおこなわれます。

☆ しろくまのおすすめ↓「ことばのノート」をつくらう！

塾の講義でも、学校の講義でも、自分が聞いたことがない言葉、あるいは、聞いたことがあるけど、ちゃんと意味を知らずにあいまいに使っていた言葉を、ささっと書き記して、あとで調べて意味を書く、というためのノートです。メモ帳みたいな大きさでもかまいません。

いつも携帯していて、道を歩いていて目についた看板の言葉、電車でもなりのおじさん、おばさんが話していた言葉の中で、え？ それどんな意味？ というものを拾っていく…で、あとで辞書で調べたりお父さんお母さんにきいてみる…

塾への行き帰りの電車の中だけでも一つや二つ、言葉を拾っていけると思うよー いっぱい集めてみましょうー

問3について

さっそく「表現」に関する言葉が拾うことができるねー

「ちなみに」ってわかるかな？ 漢字では「因みに」って書きます。「今まで話してきたことと関連して、参考までに、言葉を付け足しますと…」という意味です。一度これを使って短文を作成してごらん。何か例文は作れるかな？

「いみじくも」： これなど小学生にはなじみのない言葉でしょ？

「…いみじくも勝利を得た」とか使うと、どういうことか、わかるかな？ 「表現が適切である」「うまくチャンスを得た」という場合に使います。ここでは「勝利」という言葉があるから「うまくチャンスを得て勝っちゃった」てな感じになると思うよ。

「くしくも」は「奇しくも」と書きます。「ふしぎなことに」という意味で使います。これも何か短文を作成してみてもいいかな？

ここでは「ウ」の「またぞろ」が入ります。

もともと「又候」で「またぞろ」と読みました。「時機を過ぎたことが復活した場合」「おどろき」や「あきれた」という意味をこめて使うもの、です。

「またまた」という言葉はよく使うでしょう？ 「またまた失敗」というと「今度はうまくいくと思っていたのに…」という気持ちがおこめられている感じになります。「またまた」は「予想外のおどろき」で「またぞろ」は「あきれたおどろき」です。

よく、「またまた30点かっ」となると、ついつい予想していたかのような場合に使いますが、もともとは「予想外」のおどろきです。これに対して「またぞろ30点かっ」となると、何回30点とったら気がすむねー あきれたヤツだっ という意味になります。

「またぞろ」には「ちょっとうんざり」という意味が入りそうですよね。

問4について

さて、みなさんはどんな題名を考えましたか？ 「水の月のはじまり」というのもよさそうだし、「どくだみに降る雨」みたいなことを考えた人もいますか？

しろくまは「夏の序曲」がよいと思いました。

☆ 随筆は、「事実↓感想」という形で説明する。

随筆の読み取りは筆者の「思い」を感じ取れば成功です。とくに

☆ A ↓ B

→

C

Aという気持ちでCによってBに変わった、あるいは、CによってBに気がついた、という形でまとめられています。

「水の月のはじまり」という題名だとすると、ここで取り上げられている例は、「水の月のはじまり」に集まらなくてはなりません。

でも、どうでしょう。最初のクールビズの話、衣更えは、「水」とはつながりにくいですよね…

最初は「冬服から夏服へ」、ネクタイをやめる… という話です。「水の月のはじまり」だと、どうしても最初の「事実」を包み込めません。「始まり」と関係の深い表現、「序曲」に注目すればどうでしょうか？ クールビズの始まり、夏服の始まり、雨の季節の始まり、緑と土の匂いが立ち上る… これらはすべて「何の始まりか」。

「序曲」というのは劇やオペラが始まる前に、もうすぐ始まりですよ、今から始まる物語はこういう感じですよ、ということを示す「音楽」です。「夏が始まる前ぶれ」のいろいろな事実を筆者は「感じた」わけです。「CでBを感じる」という図式ならば、夏服で夏の始まりを、クールビズで夏の始まりを、雨の季節で夏の始まりを、緑と土の匂いで、夏の始まりを…

気づかせたものすべてが題名になるわけですから、これらをすべてどうまとめるか、言い換えるか…

☆ 比喩表現は筆者の思いが深い部分

「夏への序曲」を聴くような： ようするに、「なんかカッコつけた表現やなあ」と思う部分こそ、「みせどころ」でしょう？ 人はここぞというところでちよっとカッコをつけるでしょう。随筆はこういうカッコをつけた表現にとくに気をつけて読んでほしいのです。

「始まり」をどうカッコつけて表現するか： ここでは「序曲」という表現でカッコをつけているのですね

「夏への序曲」。「筆者は、夏が来たことを実感できるものに『始まり』を感じているから」みたいな答えが書いていればよいのではないのでしょうか。